



雲晴

新年号

「雲晴」第九号

平成二十六年一月一日発行

貞林院 瑞正寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五丁目四六―五
TEL 電話 (03) 3627-3411
FAX (03) 5699-5915

謹んで新春の

お慶びを申し上げます



平成の年号も二十六回目の春を迎えることになりました。新しい年として、一月を特に正月といい、年始として心新たに、身も心も神仏に祈りを捧げ感謝の念を持つ時です。

春を迎えて初めの行事が七草です。

五節句の最初の節句で、この日は七草粥を食べて一年の豊作と無病息災を願います。かつては前日に野山で菜を摘み、年棚という歳神を祭った棚の前で七草嚙を唄いながら、すりこぎで叩いていたそうです。

地方により異なりますが、セリ、ナ

ズナ、ハコベラ、ホトケノザ、ゴギョウ、スズナ、スズシロが一般的な七草です。

気温が十五度を超えると、人は春を感じるに云われています。晩冬（小寒から立秋の前日ごろまで）の季語に、『春隣る』というのがあり、すぐそこまで春が来ている感じを表現しています。実際、暦のうえでは寒は、小寒と大寒を合わせた期間をいい、冬至後十五日目（一月五日頃）に始まり、立春の前日（節分）で終わる。しかし、寒明けでも、まだまだ寒い日が多いのが二月です。

『冬芽』は秋のあいだに生まれ、冬を越す緑の芽のこと。長い冬を、梢の先で身をかくしてジッと春を待ちつつけています。しかし二月ともなると、見た目には変化がなくなるとも、冬芽自身の中では若葉の季節に向けて胎動が始まっているのです。山では雪解けが始まり、北国では凍っていた土がゆるみ、森からは小鳥の囀りが聞こえてくる。冬から春への、かすかな動きがそこかしこで感じられる季節、それは、身も心も「和」のような動きです。

留学生の皆さんは、将来、世界の平

和に貢献いただける、かけがえのない

人材です。しかし私費留学生の皆さん

は、経済的に苦難をしいられ、短い睡

眠時間で学問研究とアルバイトを両立

●留学生希望図書支援●

させるべく、頑張っていらっしゃる方がほとんどだと知らされました。この文章は私が理事長を務めております浄土宗平和協会の「ブックギフト」という一事業の実施要綱挨拶文の書き

出しの文です。

日本は仏教だけでなく様々な文化政

治体制、経済システムなども古代から

近代に至るまで留学生による交流が発

端となつて発展したことは歴史が教え

九品寺住職 荻野 順雄

る事実です。日本の留学生も世界中の留学生から支援をいただいています。その「恩返し」の気持ちと留学生への激励の心を込めて、学業に必要な希望図書（一万円内）を贈呈し始めてから

五年……。東京、関西、名古屋の大学

生（一〇〇名）が中心ですが全国展開

を目指しています。毎回のことですが、

留学生の皆さんの図書授与式での笑顔、

また異口同音に語られる感謝のことば

と、ともすれば宗教者以上に純粹に平和を希望する思いにふれる時、大きな

感動をおぼえます。日本文化にふれてほしいとの願いから、本山での授与式を続けています。国や言葉、肌の色は違えど、人と人とは分かり合える存在なのだ、「共」に「生」きていけるのだという希望を与えてくれます。

民話の宝箱

かさじぞう

●共生のこころ



昔 あるところに、貧乏なおじいさんと おばさんが あつたと。

じいさんは、毎日、編み笠をこしらえては、町にでかけ それを売って、暮らしていたと。

ある年の大晦日。じいさんは、「ばあさん、ばあさん。今日は、笠を五つも、こしらえたから、町で正月のもち 買ってくるべ。今年こさ、いい年をとるべな」というと。ばあさん、

「はい、はい。じゃ、火たいてまっ

ているから」といって、じいさんが出

かけていったと。

さて、町へきて じいさんは、

「かさや、かさや。かさはいらぬか」

こういって、町じゅういったりきたりと、

いくども歩いた。けれどまだれひとり買

売れても、じいさんの編み笠なんか、みむきもされなかつたと。そのうちに日が暮れて、雪がふつてきたので、じいさんは、かたなく、編み笠をせおつてもどつてきた。とちゅうの野原にさしかかつたころには、とうとうふぶきになつてきた。野原には石のじぞうさまたちが、立っているばかり。見ればふぶきにさらされてならんでござつた。「あやあ 雪かぶつて さぞさむかるう」じいさんは、売りものの編み笠を、じゅんじゅんに、じぞうさまにかぶせると、六にんのじぞうさまなのでひ

一口法話



導きの教え

かつてフランスの哲学者サルトルは日本での講演で、「人間は、それまで知らなかつたことを知つたならば、その時からある意味で、義務や役割が生じるものだ。」（知識と役割）というようなことを述べていました。

昔と違い、沢山の知識や情報を持つようになつた私たち現代人間はそれを正しく活用し、今の時代に生きる努力をしなければ、人間としてほんとうに生きる価値がないということです。まさにその通りですが、いまそこに、何か大切なものが欠けてしまつていふように思えてなりません。私たちはご先祖さまから、元をただせば、み仏様のご縁をいただいて、この世に人間として生まれてきたのです。ですから、他の生き物にはない生き方、役割があるはず。それを果たさなかつたら人間として生まれてきたかきがありません。

書の誘い

「念書一如」

貞林院瑞正寺 住職 林 清方



そこで、さいごのじぞうさまには、じぶんのかぶつていた 編み笠をぬいでかぶせて、そのままうちへかえつたと。うちでは、ばあさんが、もちをかつてくるだろうとまっていたが、じいさんは、じぶんの笠までなくして、かえつてきた。そして、じいさんが、編み笠は売れなくて、六じぞうさまにかぶせてきたと、はなすと、
「そうか、そうか。あげてよかったな。そらだば、つけもので、としをとるべ」
正月のあけがたに、どこかで、
「よいき、よいき、よいきな」と、そりひきのこえがする。かけこえは、だんだんうちのほうへ、ちかよってくる。「じいや、ばあや、うちはどこだ。よいういさ、よいういさ、よいういさな」



と、きこえてくる。じいさんは、「おお、ここだ、ここだ」と、こえをかけて、がらりと、あまどをあけてみた。すると、そこからじゅうがかるくかがやいて、六にんの編み笠をかぶったひとたちが、
「よいういさ、よいういさ、どっこいしょ」と、たわらをのきばたにおろして、のっこ、のっこ、とかえつていったと。じいさんと、ばあさんが、たわらを見れば、正月の、もちやら、さかなやら、いえにかざる宝やら、黄金やらが、どつきり、つまつて、かぞえきれないくらいあつたのだつたと。それから、ふたりは、
しあわせになつたとさ、どつとはらい。

◆無償の施しがご老人にも幸せを……

お釈迦様が説かれた教えがお経です。「経」とは、もともと織物のたて糸のことで、物事のすじ道、道理を意味しています。ですからお釈迦様の教え、仏教は私たちの生き方のよい所、お手本であるわけです。お釈迦様はまず、仏・法・僧の三宝を大切にせよと説かれています。これはやさしく言えば、明るく・正しく・仲良くする生き方をしましようということ。そのためには、個人的な欲望を捨て、腹を立てず、愚かな自分に気づき改めなければならぬのです。が、これは簡単なようであらう。が、これは簡単なことではない。 (総本山知恩院布教師会ホームページより)

今回より「書への誘い」と題して作ります。

品の紹介をいたします。作品はすべて先代住職 林錦洞の遺墨(亡くなった書家が残した作品)です。

先代は平成二十一年に八十七歳で正念往生いたしました。僧侶であるとともに書家として国内外で書展の開催や各地に墨跡を残しております。林錦洞は大正十一年に岩手県遠野市善明寺に生まれ、林祖洞に師事し書道を学び、後に浄土宗芸術家協会理事長・産経国際書会名誉理事等を歴任、平成十一年には郷土の文化興隆に尽くした功績を認められ、遠野市名誉市民となつてい

錦洞の生きる姿勢であり理念でした。

人生には心の支えとなるものが必要であり、それが念仏であることは言うまでもありません。

今の人生で大事なものの、それが仕事であり家庭であり、あるいは学業であっても、それらを全うするための心の支えとなるものが、念仏であるということです。

自分の人間としての生き方の背景にきちんと生きていること、それを理解し、その一瞬に全生命を燃やし、燃えつくすことが本当の人生であり芸術であるという精神、すなわちそれが「念書一如」です。

春



迎

謹賀新年

寺内一同、おかげさまで元気に年を越すことができました。

今年も心を新たに精進いたしますので、檀信徒の皆様におかれましては、今後とも寺の護持興隆にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

午年の守り本尊は勢至菩薩です。浄土宗の御本尊である阿弥陀さまの両脇には、向かって右に観音菩薩、左がこの勢至菩薩です。智慧の光により私たちを地獄に落ちないようお救い下さる菩薩です。住職は本年、年男で還暦を迎えますが、これからも知恵を磨いてより良い寺作りを目指したいと思っておりますので、宜しくお願い申し上げます。

平成二十六年甲午 元旦

貞林院瑞正寺

住職 林 清方
副住職 林 良政
法類總代 林 英道
同寺總代世話人 一道

平成二十六年

年中行事のお知らせ

本年の行事につきましては、下記のとおり予定しております。近づきましたらあらためてご案内いたしますので、お誘い合わせの上ご参詣ください。

*春・秋彼岸会法要につきましては、あらためてご案内をしておりますが、お中日に塔婆回向をしておりますので、

ご希望の方は電話・ファックス、メール等によりお申し込みください。

*春彼岸会法要 三月二一日(金)
施餓鬼会法要 五月十四日(木)
七月お盆法要 七月十三日(日)
八月お盆法要 八月十三日(水)
*秋彼岸会法要 九月二三日(火)

平成二十五年

貞林院瑞正寺団参

『大本山善導寺と長崎を訪ねて』

昨年の十一月十八日から二泊三日で団参を行いました。今回は福岡県久留米市にある「善導寺」をお参りしました。「善導寺」は二回目の団参となりましたが、法然上人八百年御遠忌に併せて、境内整備や庫裡等の修復工事が行われたため、前回とは見違えるほど全てが綺麗になっていました。浄土宗の末寺としても大本山がこのような立派になることは大変に喜ばしいことです。



大本山善導寺本堂にて記念写真

また「善導寺」の近くにある天台宗の「観音寺」にもお参りしました。

この寺は遠野の善明寺の開山である金光上人も住職をしていたことのある寺であります。金光上人は法然上人の教えに感銘し、天台宗から浄土宗に移り、東北の念仏布教に努めたお方です。今回のもう一つの目的は長崎の「松浦資料博物館」の見学でした。当山にお参りしております松浦河内守信正は、現在の松浦市が本家であり、この資料館には松浦家に関する貴重な資料が多く展示されており興味深いものでした。

◇浄土宗一口メモ◇

「浄土宗の本山について①」

「天照山光明寺」

鎌倉の材木座にあります光明寺は芝の増上寺とともに関東の大本山であり、鎌倉時代(一二四三年)に浄土宗の三祖である良忠上人により開かれました。良忠上人は浄土宗に関する多くの書物を残しており、徳川家康公はこの寺を関東十八檀林(徳川幕府が定めた学門所)の筆頭とし、その後念仏信仰と仏教研鑽の根本道場となりました。

なお平成二十三年には、当山の団参でお参りしております。

(創刊号を参照)

(貞林院瑞正寺)